

北総の子安像塔Ⅱ江戸時代末期から現代までの様相について

藤 由美

はじめに

北総地域に特異に多くみられる子安像塔について、本誌二十号では、江戸時代中期におけるその出現と成立の過程を、二十一号では、江戸時代後期（文化〜天保期）におけるその展開について報告した。

なお、二十号で述べたとおり、「子安像塔」とは、造立の意図・目的にかかわらず、主尊の観音または女神像が、母性をあきらかにして子供と一体となっている像容の石塔・石祠を総称する。この像容については、仏典などによる儀軌はない。

北総での最も早い講による子安像塔は、酒々井町尾上神社の享保十八年（一七三三）「子安大明神」銘の立像、次いで、元文五年（一七四〇）同じく酒々井町柏木の子安像石祠である。前者の立像の像容は系譜的には孤立していて淵源がたどれないが、後者の元文五年の子安石祠の像容は、石祠内に母像とふたりの子がいるという特異な二つの特徴があり、このルーツを千葉県最古の元禄四年（一六九二）銘をもつ袖ヶ浦市百目木（どうめき）の「子安大明神」像に求めることができる。

また同元文五年、利根川沿いの栄町では、仏像を思わせる光背型「子安観音」銘の坐像、翌元文六年（一七四一）小見川町で「八日講」の子安像塔が相次いで現れ、印旛沼東岸には、宝

暦年間（一七五〇年代）思惟相の如意輪観音像に子を抱かせた像が、さらに安永年間（一七七〇年代）それら①石祠、②二児、③光背型、④思惟相の各要素がクロスした子安像塔が北総各地に展開していくが、この江戸時代中期の頃はまだ如意輪観音像を主尊とする十九夜塔が圧倒的に主流で、享和（一八〇三）までの子安像塔の数は一〇九基にとどまる。

江戸時代後期前半の文化〜天保期（一八〇四〜一八四三）になると、化政文化の影響で、軟らかい石材に複雑で装飾性の富んだ像容が増加し、また数量も四十年間で一七五基を数えるようになる。

本稿では、前号の報告での続き、江戸時代末期の弘化元年（一八四四）より現在（二〇二二）までの子安像塔六九三基、そのうち記年銘が明らかな六七九基についての様相、すなわち所在および数量、その像容の特徴などの調査結果を報告したい。近代から現代にいたるこの時期は、子安像塔がこの地域の女人講建立石造物の主流となり、数量では他の講も含めた石造物の代表的な石塔となる時代である。

なお、調査したデータ数が多く、一基一項目の一覧表では膨大になるので、表・1のように一所在地毎に整理し、和暦の年銘を列記した。

同一箇所頻りに造塔が行われ、石塔群となっている地域と、単独に建立した子安像塔を祠や小社に奉り祭祀を行っている地域が、ともに併存する実態をこの表からみていただけたらと思う。

一、江戸時代末期（弘化〜慶応年間）の子安像塔

江戸時代末期の弘化元年から慶応三年（一八六七）まで三十三年間の子安像塔数は百二十基で、十年間単位の平均数は約三六基である。江戸時代の子安像塔のピークの時代は、後期前半の文化・文政・天保期で、十年間約四十基を数える。後期後半はやや減少気味であるが、石田年子氏の集計（*参考資料）によれば、この時期の十九夜塔が、後期前半十年間約八二基から後半に約五六基へとより大きく減少していることを考えると、この後に続く近代において子安像塔が女人講の石塔の主流となることを予期させる数といえよう。

形態は、安政六年（一八五九）の鎌ヶ谷市軽井沢八幡神社と、慶応元年（一八六五）松戸市金ヶ作八坂神社（下図）の二基が石祠に像を置く。それ以外は、ほとんどが舟型光背型の浮彫像で、楡型や駒型もみられる。



丸彫り像は、安政四年（一八五七）千葉市畑町十二社神社に二児を配する坐像（下図）があり、同年の四街道市長岡石塔群の楡型光背の浮彫像と作風が類似することから、同一の石工の作と推定される。



石質は主に目の細かい凝灰岩であるが、や礫の混じった堆積岩も多く使われ、屋外に設置されたものの遺存状態はよくない。

像容については、①江戸時代後期前半までの特徴を残すもの、

②この時期に出現し、明治以降にも継承され、近現代の像容の基本型となるもの、③個性的で類型化の少ないものがある。

①では、思惟相のタイプ1.の二基と、右に上体を傾斜し子を両手で抱くタイプ（2・3.）は、江戸中期からの基本となる像容であるが、明治以降の近現代には継承されず、幕末にほぼ終了する。②のタイプとしては、4.と8.が近現代の代表的作例に発展する。

*江戸時代末期の像容の代表例

1. 文久三年（一八六三） 香取市織幡花見寺

如意輪観音像が上体を右に上体を傾斜し右手を頬に当てる思惟相のまま左手で子を抱く復古タイプ



（類例）文久四年銘（一八六四）佐倉市畔田 正光寺

2. 弘化四年（一八四七）印旛村山田三五四三付近集会所

半跏方向に上体を傾斜し、両手で子を抱く江戸時代後期前半までの基本スタイルを継承する。



（類例）嘉永三年（一八五〇）佐倉市土浮正福寺

- ・ 同年印旛村瀬戸徳性院
- ・ 嘉永六年（一八五三）沼南町手賀明王院跡
- ・ 安政六年（一八五九）印旛村岩戸西福寺
- ・ 同年印西市泉集会所

3. 弘化三年（一八四六）白井市中薬師堂
2. と異なり左膝を立てる。

この白井市中薬師堂の子安塔は単独に祠内に安置されて、保存状態は良好、彩色も残る。江戸期後期後半では、最も美しく気品ある子安塔である。

〈類例〉 弘化四年（一八四七）神埼町大貫興福寺

4. 嘉永五年（一八五二）栄町請方皇大神社

高い宝髻を結び、左手に蓮華を持ち、子が乳房をつかむ像。右ひざを立てて右手で子を抱く。やや右上体を傾け、顔立ちは正面やや下向きで表情はかたい。天冠台上に高く結い上げた宝髻を数本の直線



で表現、左手は未敷蓮華と蓮の葉の二本の茎を持つ。子が右手で母像の左乳房をつかむしぐさがかわいらしい。母像の天衣の屈曲した裾が、右立膝の後方のほか、左膝の前に台石に垂れて表現される。

隙のない構図と端正で威厳ある作風は、若干の変遷を経て、二・7. や二・8. など幕末から近現代の子安像塔の一つの代表的像容の原型となる。

この像と細部まで一致する像は、幕末まで栄町二基、印旛村二基、印西市三基、八千代市一基の計九基ある。（表・3参照）

5. 嘉永五年（一八五二）酒々井町上岩橋馬頭観音堂

右へ上体を傾けて子を抱き、左手に未敷蓮華を持つ。優しい作風。

〈類例〉 嘉永四年（一八五一）佐倉市飯重大宮神社



6. 嘉永七年銘（一八五四）千葉市横戸町明星寺

優しいまなざしと柔らかな衣文の表現が個性的な逸品。

〈類例〉 嘉永三年（一八五〇）千葉市花島町天福寺



7. 嘉永七年銘（一八五四）印西市戸神青年館

右手にでんでん太鼓を持つ。

〔類型〕弘化五年

（一八四八）千葉市

若松町 若松公民館

・安政二年（一八

五五）四街道市四街

道金比羅宮（風車

か？）



8. 文久元年（一八六一）八千代市大和田 円光院

豊満な表現の優

雅な像。丸々とし

た子や乳房などは

近代に入ってから

に強調されて類型

化されていく。

〔類型〕安政四

年（一八五七）船

橋市山手 諏訪神

社



9. 慶応三年（一八六七）八千代市麦丸 東福院

天保十年代の船橋市や鎌ヶ谷市に流行した子が膝に這い上がる姿の像。これは左手に達磨をもつが、持たない姿もある。明治以降にも二、1.のようにこの類型が多く作られる。

〔類型〕嘉永四年（一八五二）印西市 大久保勢至堂

・弘化四年（一

八五七）船橋市八

木が谷 長福寺

・弘化五年銘（一

八四八）八千代市

米本 長福寺



二、近代（明治元年〜昭和二十年）の子安像塔

北総でも戊辰戦争の戦鬪があつた明治元年（一八六八）とその翌年は一時的に子安像塔の建立はなかつたが、明治三年から明治期末までに二五七基、大正期に九三基、昭和前期（二十年

一九四五まで）に六一基の造塔あり、平均すると、明治から大正期の終わりまで十年に六十基という数にのぼり、子安像塔はこの半世紀に最も多数の造塔があつたことになる。（表・2参照）

如意輪観音像主体の十九夜塔は、この時代にほとんど子安像塔か、一部は文字塔にかわるが、講の名称として「十九夜」の銘を残す子安像塔も多数ある。

形態は、すべて光背型浮彫像になり、蓮台は省略されるか、簡略な線彫りになり、高さのある台石に大きく「女人講」等の講名を前面に横書きし、側面に講の参加者や世話人の多数の名を縦書きで列記するようになる。

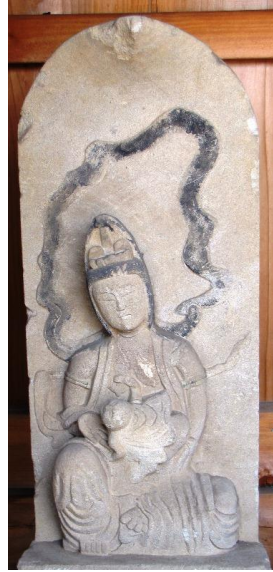
像容については、幕末期の一、4.のように、細部まで同じ意匠の規格化されたいくつかのタイプや安易な模倣が多くなり、また石工の技術低下のため、芸術性のある作品は減少する。

一方、近代後半、特に大正期は、簡略化の方向でデフォルメされたデザインや独創的で奇抜な像容も目立つようになる。

*近代の像容の代表例

1. 明治三一年（一八九八）八千代市島田台長唱寺

子が這い上がりうとする姿の像。天保十年代から続く一・9.のデザインを踏襲している。十九世紀後半を代表する美しい像である。



〔類型〕 明治三年（一八七〇）船橋市飯山満町王子神社

- ・ 明治七年（一八七四）八千代市村上字宮内路傍
- ・ 明治八年（一八七五）八千代市米本字逆水薬師堂
- ・ 明治三十年（一八九七）香取市大戸川禅昌寺
- ・ 昭和三五年（一九六〇）船橋市宮本五丁目路傍

2. 明治十年（一八七七）白井市名内東光院

乳を無心に吸う丸々とした子と童女のようなあどけない表情の母像の姿が特徴。正面を向く穏やかな像の髪型は、被布のように長く垂らした髪を頭頂で双鬢に結びあげている。一切の装飾を排したシンプルな構図が近代らしい。ふくよかな印象の母子像である。



類型は、明治三年（一八八六）の船橋市八木が谷長福寺から明治二六年（一八九三）習志野市大久保薬師寺まで白井・八千代市中心に十一基ある。

（以下、類型は、表・3参照のこと）

その中でも明治二十年（一八八七）船橋市古作町熊野神社の子安神として祀られている像（下図）は、北総における子安塔分布の最西端に位置する像として貴重な像である。



3. 明治三三年（一九〇〇）船橋市金堀町竜蔵院

一・8.と二・2.の系譜をひく豊満さを強調した子安像。

明治十九年（一八八六）船橋市八木が谷長福寺と八千代市吉橋寺台公会堂に、同形の像が作られる。

よだれかけをした子供の頭部が大きく強調され、大正二年（一九一三）八千代市村上の辺田前公会堂の子安塔で頂点に達する。

栄養がいき

わたったよう

なこれらの母

子像は、明治

の終わりから

大正期にかけ

て富国強兵を

背景に『産め

よ増やせよ』

の時代であったこと、また宗教的な因習を排し、母子保健に力が注がれた時代であったことを象徴している。

このふくよかタイプの子安塔は、昭和九年（一九三四）の八



千代市大和田新田字庚塚の子安塔で終焉し、その後は15.のタイプに引き継がれ、やがて戦時下の時代となる。

類型は、白井市・八千代市・船橋市に二十基分布する。

4. 明治十三年（一八八〇） 白井市向台薬師堂

一、4.の像容

とは、上体をやや傾け未敷蓮華を持つなど基本的な同じ構成であるが、細部にわたる図像の画一性は少なく、また作風も厳めしくなく、素朴でやさしい印象を与える。

類型は幕末から明治期に印西市・白井市を中心に十六基分布する。また現代にこの像容に似た作がある。

5. 明治十一年（一八七八） 千葉市犢橋町御成街道路傍

右ひざを立て、

右手で子を抱く。

上体と顔は正面向き。宝髻は低い。

左手に未敷蓮華を高く持つ。頭部背後に天衣が、蝶が羽を広げたように華やかに四角形に広がる。その内側に細かい凹凸で裝飾する。



また時代が下るとともに、顔が童女のように丸顔になる。（下図は明治四五年、同所）

類型は、明治期

前半から大正期末

まで二一基が、千葉市犢橋町の御成街道路沿いから、習志野市、四街道市、八千代市に分布する

6. 明治十五年（一八八二） 千葉市花島町天福寺

5.の頭部背後

の天衣にかわり、光輪が廻る。光輪内部は5.と同様に細かい凹凸を施す。

カールした髪、肩にかかるリボンが華やかである。

明治期中葉と昭和期前半に立てられた九基が、千葉市と隣接する八千代市南部に分布する。

7. 明治十七年（一八八四） 印西市泉集会所

正面を向き、右膝を立て、両足の平を合わせ、左手に未敷蓮華を持つ。子の右手が乳房をつかみ、左手に達磨を持つ。

一、4.がやや横向きで、また二、8.が天衣の翻ることを除けば、作風は一、4.と二、8.にほぼ同じである。



類型は一六基を数え、特に印西市と印旛村に多いが、明治後半には、次の8.の像容に移行する。



8. 明治十九年（一八八六） 印西市戸神青年館

近現代の代表的な像容である。

正面を向き、天衣が両肩から頭部背後に水平に広がり逆三角形を形



作ることが特徴。その裾が左膝の前に波打って下がる。

右手で子を抱き、左手は未敷蓮華と蓮の葉の二本の茎を持つ。子の右手が母像の左乳房をつかみ、左手に達磨を持つ。天冠台上の宝髻はさらに高く直線的になる。

この謹厳実直な作風は、明治期後半から現代まで持続し、計四三基を数える。このうち細部まで同様ないくつかは、同一工房の量産品であった可能性がある。

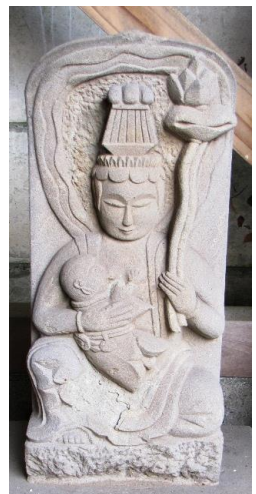
9. 大正七年（一九一八） 千葉市柏井町稻荷神社

天衣が頭部より高く水平に広がり、天衣が囲む空間には、5.と6.と同じく凹凸を施す。

直線を刻む角張った台形の宝髻に三つの円形の飾りがつくの

が特徴で、千葉市北西部中心の5.と6.が、印西市などに多い8.の強い影響を受け、変容したとみられる。

大正四年（一九一五）佐倉市上志津西福寺から、千葉市横戸の昭和九年（一九三四）まで、同形が五基存在する。



10. 明治二七年（一八九四） 千葉市横戸町明星寺

明治期後半に八千代市高津観音寺近辺に十一基が分布。

持ち物や宝髻など微妙に像容が異なるが、作風がほぼ一致し、同一の工房の作と思われるものもある。



明治二十年代は頭巾風の双髻だったが、三十年代に三角状の宝髻に変化する。

下図は明治三二年（一八九九）佐倉市小竹西作地藏堂。

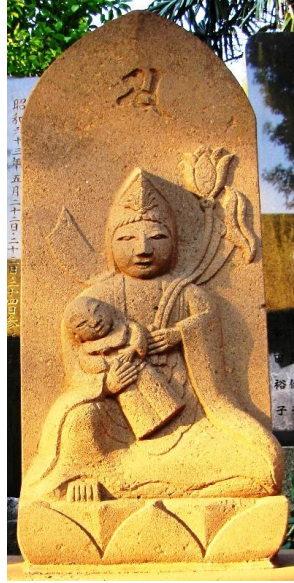
また頭部の両脇に垂髪または冠帯と思われる帯状の飾りが舞い上がるようにあらわされ



目の表現が、時代が下るとともに吊り上った引目型になる。花型環状のよだれかけをした子は前向きになり、乳房をつかむ表現はなくなる。

台座部分に玩具のモチーフが線彫りされることもある。

11. 大正八年（一九一九）八千代市大和田円光院



明治期末から大正期末まで、八千代市大和田新田を中心に、船橋市から佐倉市にかけて成田街道沿いの町村に十三基し、平成にも一基新設された。

10. の像容の系譜をひくが、図像的に整理され、近代の洗練された代表的作例のひとつとなっている。栗の実状の宝髻と舞い上がる帯状の垂髪（？）、レンズ状の目が特徴。

大和田新田では永

く地域で愛された像容らしく、平成十八年（二〇〇六）に大和田新田上区八幡神社では新規に建立された子安塔のデザインにもこの像容が採用されている。（下図）



12. 大正七年（一九一八）印西市小林光明寺墓地



明治後半から大正期、印西市を中心に十六基、現代に二基造られる。高く角張った宝髻と丸顔に沿った垂髪、子の背に右手を添えて授乳させ、左脛部と子の衣に沈線で髻を表現する。

13. 大正十年（一九二二）佐倉市小竹西作地藏堂

12. の像容を単純化、デフォルメした図像で、直線的で機械的な彫り方など、近代末期の石工の技量低下に対応したデザインとなっている。



明治期末から昭和初期に十四基、現代に三基ある。12. と同様、印旛村、佐倉市に分布する。

14. 大正七年（一九一八）八千代市桑納威光院

宝冠上の三つの丸い髻と右に上体を傾けた特徴は明治四一年（一九〇八）八千代市小池安房神社などの像容に由来すると

思われる。

類型は明治四一年から昭和十年（一九三五）鎌ヶ谷市軽井沢八幡神社まで、九基あり、細長い光背いっぱい配置するデザインは、大正期の獨創性を表している。



15. 昭和十五年（一九四〇）八千代市下高野 福蔵院

丸顔に垂髪、頭上に双髻を結び、簪のように華やかな冠帯と、頭部後ろの天衣が特徴。ゆったりした姿勢で乳を与える姿は、優雅である。



昭和前期の代表作で、八千代市と佐倉市の隣接地に五基ある。

*この後はアジア太平洋戦争の激化とともに急減する。

昭和十六年（一九四一）は八千代市村上正覚院と本埜村に各一基、銚子市の二基、昭和十八年（一九四三）は白井市所沢寮の一基、そして昭和二十年の終戦の年に八千代市と佐倉市で各一基のみの建立で、昭和十七年と十九年は、皆無であった。

この昭和十八年の白井市の子安塔も、いかにも素人の作とみられる稚拙な像で、戦争中、おそろく石工に依頼できる状況ではなかったのだろうと推察される。（下図）



三、現代（昭和二十一年〜平成二二年）の子安像塔

戦前に連続して建立してきた地域では、戦後はまもなく、子安像塔の建立が復活される。おおむね戦前の大正期に定型化した様式の模倣であるが、昭和二十年代だけで二九基の造塔があった。

昭和三十年前後になると、彫像技術をもつ石工の不足か、分類不可の試行錯誤のような建塔も多く、かえって像容が定まらなくなる。

風貌はなぜか異国風、未敷蓮華の意味も不明なのか、トーチ風あるいは錫杖風に表現され、また構図自体に無理があるものなど、鑑賞に堪えるものは少ないが、地域では安易な文字塔ではなく、子安像のある塔を建てることに意義があったのだろう。

八千代市周辺の農村もベビーブームに続く子育ての時代であり、子安講は戦前以上に活発だったと聞きする。

（下図は昭和二九年 印旛村師戸 広福寺）

昭和四十年代後半になると、機械彫刻



も可能になり、石材も花崗岩を使って本研磨した作品が出てくる。デザインさえ決まれば、どんなものでも量産できるとのことである。

二、11.で紹介した大和田新田上区の平成一八年の子安塔のように、地域の習慣と信仰に根ざした講で建立することを重じ、伝統的な独自の様式を継承した新しい子安像塔も建てられている。

ちなみに二段積みの上の台石はますます厚く大きくなり、「女人講中」、まれに「子安講中」と大きく記される。なお左から右へ横書き書かれるのは、昭和五四年（一九七九）ごろからのようである。

以上のように子安像塔は、戦前から連続して建塔する慣習の地域で、戦後も昭和二一年から昭和期末まで九五基、平成元年から現在までは、巡検可能な八千代市周辺で十九基を確認した。一方、子育ての終わった子安講が秩父観音巡礼講に転換し、子安塔から文字碑の秩父巡拝供養塔へ切り替わっていく地域もみられる。

また、民俗信仰や寺院の宗派とは関係なく、大きな子安観音像が建立される場合もみられる。子安像塔の皆無だった市川市でも、昭和五十年代に丸彫りの立像が「水子観音」や「南無観世音菩薩」の銘で各々二つの寺院に建立されている。本報告では、このような事例については省略し、現代の子安像塔のうち、伝統的な系譜の追える像容と、新しく地域に普及しつつある像容を中心に紹介する。

*現代の像容の代表例

1. 昭和二四年（一九四九）香取市田部西雲寺

香取市と東庄町に大正期末から昭和初期に教基見られる像容で、白衣観音のような被布を頭にまとい、長い髪が胸元で二条

に分かれて垂れ下がる。子が左乳首を口で吸い、右手で母の右乳首をつかむ。振袖の着物を着て帯を結ぶ子を母像が見つめる慈愛に満ちた姿で、戦後も間もなく同じ場所に造られた。

この像容が多少改変され、佐倉市生谷専栄寺に昭和六十年一九八五（下図）と最新の平成二一年（二〇〇九）の現代的な像に取り入れられている。

2. 昭和四五年（一九七〇）千葉市下横戸公会堂

白衣観音風の布を被り、左手に蓮華を持つ。

この像と同じ姿の像が、平成五年小竹西作地藏堂に、また彩色のある子安像

が、昭和五三年（一九七九）銚子市浅間神社にある。

下横戸近辺と銚子市はかなり距離があるが、1.の事例と同じく、同系の図像が全く別の地域で採用されている。



3. 昭和五四年（一九七九）佐倉市上志津西福寺



縦に数本の直線の筋が入った長半円形の宝冠が特徴で、上志津の西福寺には同系統が六基、その他近隣の八千代市・千葉市に類型が九基ある。

石質も悪く、稚拙なデザインのもが多かったが、上志津西福寺では、地域の伝統的な像容を継承しつつ、現代的な新しい子安像塔へと変貌している。

4. 昭和六三年（一九八八）白井市向台薬師堂
昭和五三年
（一九七八の）

印旛村師戸広福寺の子安像をアレンジした像容で現在七基の建立がある。



宝冠をつけた丸顔の母像、裸の丸々とした子、量感のある蓮華が特徴である。

下高野の福蔵院では、平成五年以降三基続けて建てられており、地域で定着した像容になってきつつある。

おわりに

石造物の観賞と調査の対象は、江戸時代前半の硬質の石に見事な技で彫られた石仏や、金石文史料として銘文に価値があるもの、また全国的によく目にする種類のものが多いようである。一方、子安像塔は、ローカルエリアの、しかも近現代の石質が悪く造形美にも欠けるものが多いせいなのか、まとまった調査報告がなかった。

本報告では、幕末から近現代の北総の子安像塔について、建立数では近代が時代として多く、地理的には八千代市を中心に約十五キロ圏内に多いこと、平成期になっても伝統的に造塔を続けている地域があること、像容にはいくつかの系統があることなどを明らかにし、そして、その像容の変遷過程がたどりながら、幕末から近現代の代表的な作例を紹介した。

特に、幕末以降の記年銘のある子安像塔約六百基の像容を一つ一つ見比べることにより、類型別の分類を試み、その系譜を江戸時代から時系列で追って、分布地域の地理的な関係性と、変化しつつある現在の状況をつかむ糸口になったかと思う。

なお、本稿は、対象とした子安像塔の数が多いため、幕末・近代・現代の三篇に分ける予定でしたが、子安像塔全体の概況を早くお知らせしたく、本誌二十号・二一号に続き、本号に一括して報告することにしました。そのためデータの表を簡略化し、また縮小せざるを得なかったことをお詫びします。

*参考資料Ⅱ 石田年子氏作成調査データ「下総の年代別十九夜塔造立の推移」（房総石造文化財研究会主催 二〇二一年第一七回「石仏入門講座」発表）

他は、本誌二十号・二一号掲載の拙論末尾に記載した参考資料と同じのため省略します。